



Title	『石清水物語』にみる男君たちの女性観：秋の中納言と伊予守の根源的な差異
Author(s)	井, 真弓
Citation	詞林. 2008, 43, p. 8-27
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67578
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『石清水物語』にみる男君たちの女性観

— 秋の中納言と伊予守の根源的な差異 —

井 真弓

はじめに

時代と洋の東西を問わず、恋愛譚は数多くの文学作品の題材として取り上げられ、そして生み出された様々な優れた作品を通して人類の文化的活動は深みを増し、豊かさを築いてきた。多様な文化を有する人間社会において、恋愛は高い普遍性を有しており、それに対する我々の興味もまた尽きることはない。恋愛を物語として劇的に描くために、多くの場合には恋愛成就を妨げる要因―障碍が設定される。それに対する登場人物の対応や葛藤を物語内にちりばめ、最終的に恋愛成就による達成感を提供するか、あるいは不成功によって共感を誘うのが一般的な物語構造と言える。

我が国における恋愛物語の嚆矢とされる『伊勢物語』でも、様々な障碍―身分差、近親愛、聖性等が設定されており、時に恋愛は成就し、時に悲恋に終わる。『源氏物語』においても、光源氏と様々な女君との間の恋愛が描かれ、その多くでは恋愛関係が成立しているのだが、長編であるが故に個々の

恋愛の成就・不成就そのものは物語の結末とはなっていない。光源氏と紫上の関係には、相思相愛であった二人が年月を経るにしたがい徐々に疑心暗鬼に侵食されていく様子が描かれており、二人が夫婦となるまでの過程とは一転して、その後は破綻の予兆を感じながら読者は物語を読み進めることになる。『源氏物語』に描かれている男女関係は非常に現実的であり、恋愛が一過性のものに過ぎないということを改めて感じさせる内容となっている。恋愛が破綻に向かう要因としては、当事者の内面に存在する場合もあれば、外部からの強制力による場合もある。後者の典型例が、中世王朝物語に多く見られる悲恋遁世譚である。

その一方で、現実にはあり得ないからこそ、物語世界において恋愛に永続的な絶対性を求めようとする欲求が存在することもまた、当然であろう。本稿にて取り上げる『石清水物語』は、従来は悲恋遁世譚の一種と捉えられてきたが、実は永続的な恋愛のあり方の一例を示した作品であると言える。^①数多く存在する中世王朝物語の中でも、『石清水物語』は

武士である伊予守を主人公として設定している点が特徴的であるとされている。実際には伊予守は物語の冒頭から唯一の主人公として登場しているわけではなく、当初は貴族である秋の中納言に対してあたかも主人公であるかのような描写がなされている。伊予守と秋の中納言は、やがて木幡の姫君に対して強い恋情を抱くことになるが、姫君にとって伊予守は義理の弟であり家臣筋にあたる一方で、秋の中納言は異母兄にあたり、ともに恋愛に関して禁忌の存在する間柄として設定されている。それらの禁忌に阻まれて姫君に対する恋情を満たすことができずにいる間に、二人は男色関係を結ぶに至り、その過程を通して秋の中納言から伊予守へと主人公性が移行しているとの捉え方が一般的であった。

しかしながら、秋の中納言と伊予守の男色関係に着目し、物語における秋の中納言の役割を分析したところ、物語の序盤から中盤にかけては伊予守の心情を正しく推測して読者に呈示した上で、伊予守と木幡の姫君との恋愛関係を肯定するような意見・価値判断を示す立場にあることを指摘した。秋の中納言は帝をはじめ多くの人物から高い世評を得ており、その美貌や冷静沈着な態度から主人公に匹敵する優れた資質を有する人物として設定されている。そのような優れた人物が下した価値判断は、物語世界における真理として読者に受け止められることになる。換言すれば、秋の中納言が許容したからこそ、伊予守の身分違いの恋愛あるいは私通行為は物

語内で悪行として認識されることなく、むしろ読者が感情移入して共感することのできる行動となっているのである。秋の中納言は物語における善悪判断の基準を与えるという役割を担っており、読者の代わりに物語を「見る」人物であると言えよう。ところが物語結末部において、突如伊予守の心情を正しく推測できなくなり、読者は物語を読む際の判断基準を一切取り上げられた宙に浮いた状態にされてしまう。特に物語の結末にあたる伊予守の出家の部分については、秋の中納言の言葉でその意図が語られないどころか、伊予守の出家の理由を「木幡の姫君は帝の寵を得ており、自らの恋情がもはや叶えがたい」ためであると、誤った解釈を示してしまっており、結果的に伊予守の行動は読者にとって真意の理解しづらいものとなっている。

伊予守は木幡の姫君との四回目の逢瀬を得ることで姫君の真情を知り、心の充足を得た上で、姫君との一蓮托生のために出家を決意することになる。物語結末部における伊予守の心情は葛藤を乗り越えた澄明なものになっており、これは従来の悲恋遁世物語の結末とは一線を画した本物語独自の展開となっている。このため、結末部における伊予守の心情を読者が正しく理解することは容易ではなく、読解を助けるという意味においては、物語中盤までと同様に秋の中納言に伊予守の真意を悟らせ、彼の口を借りて語らせるといった手法を用いることによって、より端的に物語の主題を表現できたはず

である。ところが、そのような利点を捨ててまでして最終段において二人の心情の乖離を設定した背景には、秋の中納言が「見る者」、すなわち伊予守の心中の代弁者という物語構造としての役割の他に、伊予守とは異なった恋愛観・女性観の持ち主であるという物語内の人物としての役割を有しているためであると考えられる。そして、伊予守が出家という行為によって恋愛を成就させ得たことと対比して、伊予守の出家の真意を理解することのできなかった秋の中納言の姿を描出すことが、本物語の主題を明快に表現するためには欠かせなかつたものと考えられるのである。伊予守の出家を描くことがこの物語の表のテーマであったとすれば、伊予守と非常に近い恋愛感情を有していたにもかかわらず、伊予守の心情の奥底を理解することのできない秋の中納言の姿を描くことが裏のテーマであり、両者が表裏一体となるために、最終段において秋の中納言は伊予守の代弁者から対抗者へと変貌するに至ったのである。本稿では、二人の根源的な差異を特に恋愛観・女性観に重点を置いて分析を行い、本物語の構造を示した上で主題を再検証する。

一 秋の中納言の恋愛観

『石清水物語』の冒頭部で、あたかも主人公であるかのよ
うな描写を伴って登場している秋の中納言は、立場や性格、
価値観等で平安期や中世王朝物語に見られる典型的な「色好

み」の主人公像を踏襲していると考えられる。以下にその詳細について検証しよう。

秋の中納言は、誰もが自分の娘との縁付きを希望するよう
な才色兼備の貴公子として描かれているが、彼の恋愛観は、
「おぼろげならんわたりをば、かかづらはじ」、「いかで人の
御かたちをも見集めて、心にとまることあらば、帝の御女な
りとも、などか得ざらん」(一三頁)という心情の吐露に象
徴されるように、「心ばえ」や「かたち」が最高の女性を強
く志向している。その一方で、草子地において「心おごりの
せらるるも、あまりなる心づかひなり」(二三頁)と評され
るように、秋の中納言自身の強い自負心が枷となり、満足ゆ
く女性と出会うことができずにいるが、さりとて身持ちが固
いわけではなく、複数の女性との遍歴が描写されている。一
例として大納言の典侍との恋愛を取り上げてみよう。大納言
の典侍との関係は「まことしく頼むばかりのよすがにはあら
ね」、「いづくをさして、心のとまりともなるべくもあらね」
(五一頁)と秋の中納言としてはあくまでもかりそめのもの
であり、逢瀬は秋の中納言側の都合や思いつきに左右されて
いる。このような秋の中納言の態度に対して大納言の典侍は、
「思ひ分かれざりし年月のいぶせさよりも、身の恨みのみま
さりけり」(五一頁)と嘆いており、女性側の心情や都合を
一切考慮しない秋の中納言によって、もてあそばれているよ
うな間柄であることが示唆されている。

幼少時より秋の中納言に仕え、召人として寵愛を得ていた按察使の君についても、女二宮が秋の中納言の正妻として降嫁するに及んで、その関係は途絶えてしまっている。このことについて按察使の君は、「ただ大方にこそ年月の習ひに、今となりてはこよなくおぼし捨てたる嘆かしさを恨むに」(八五頁)と、秋の中納言が自らを見捨てたつれない仕打ちに対して恨みを抱いている。これらの例から分かるように、秋の中納言は大納言の典侍や按察使の君のことを理想の女性候補、すなわち「心ばえ」や「かたち」が優れた女性として捉えているわけではなく、自らの欲求を満たすための娯楽としての恋愛を愉しんでいるに過ぎない。

中村真一郎氏は、「恋」というものは、もっと上品に、優雅に、遊戯的に、風情をもって行うのが、文明人の教養である、というのが、当時の「色好み」信仰のなかでの、紳士淑女たちの信念であった」と平安王朝文学作品における「色好み」を定義づけており、当時の貴族社会においては複数の女性と恋愛を愉しむ秋の中納言のような恋愛観が一般的であることを示唆している。中村修也氏も『枕草子』を例として、平安貴族たちにとっての恋愛がゲーム性を帯びて、娯楽化していたと指摘する。『竹取物語』では、かぐや姫に求婚した五人の貴公子のことを「色好み」と表現し、その定義として「色好み」とは女の「かたち」を重視して恋をすることと述べている。

『石清水物語』における秋の中納言も、前述のように女の「かたち」を重視しており、恋愛を娯楽として愉しんでいることから、まさに「色好み」の典型として人物描写されていることになる。秋の中納言の恋愛観や振る舞いは、平安期あるいは王朝物語文学において描写されているような典型的な貴族の価値観や行為を象徴したものであると言えよう。

娯楽としての恋愛を愉しみながら理想の女性を求めて遍歴する秋の中納言であるが、異母妹である木幡の姫君に出会ったからは状況が一変する。姫君を垣間見た秋の中納言は、その美しさに「あさましきまでまもり」、「胸はふたがる」状態であった。その後も姫君の面影は秋の中納言の脳裏から離れることはなく、その恋情は募ってゆく。ここで着目したいのは、秋の中納言が木幡の姫君の美しさを評価する際に、「こら見し人、片端及ぶべきこそなかりけれ」(一八頁)と表現していることである。姫君は、今まで秋の中納言が見続けた女性と比較した上で最も優れているからこそ、「心ばえ」や「かたち」が最高の女性を求めるといふ彼の希望に適った人物と言えるのである。

木幡の姫君との邂逅後、姫君こそが秋の中納言にとっての最高の女性として物語内に描写される。それは秋の中納言が、関白家に養女として引き取られた按察使大納言の女と姫君とを比較することで姫君の優位性を確認していることから明瞭である。例えば用例Aを見ると、点線部で表現される按察

使大納言の女の様子は草子地において「思ひ寄らざらん人も心つきぬべし」と、誰もが彼女に想いを寄せるようになるだろうと好意的に評価されているのだが、秋の中納言に限っては全く魅力を感じていない。逆に傍線部「まづ思ひ比ぶる片つ方思ひ出でられて」と姫君を想起し、「こよなくもありしはや」と、姫君の格段の魅力を再確認している。

A … (按察使大納言の女)「秋の中納言が」常に渡りたまはば、嬉しくて、御心に違ひきこえじ」など、心うつくしげにのたまひて、さすが気色ばかり几帳引き寄せながら、さながらあらはに見えて、髪を振りかけつつ、後目にかけて、いといたう気色ばみ、心化粧したる様、思ひ寄らざらん人も心つきぬべし。かかるにも、(秋の中納言は)まづ思ひ比ぶる片つ方(≡木幡の姫君)思ひ出でられて、しきや。(三五頁)

用例Bにおいても同様のことが窺える。点線部のように義兄である大將や秋の中納言に対してあまりに物怖じしない按察使大納言の女の姿と、用例C傍線部に見られるように、異母兄に対して恥じらう姫君の姿とを比較する(用例B傍線部)ことで、姫君への好感を強めている。このように、秋の中納言の木幡の姫君に対する恋情は、他の女性との優劣比較を繰り返し、姫君の優位性を確認することによって育まれているのである。

B この君達(≡兄大將や秋の中納言)のおはするにも、(按察使大納言の女は)つつましげならず。大將殿など、さばかり物々しく恥づかしげに、気高き御まみなどのさし向かひにくげなるにも、隔てたる気色なく、面なく、つきつきしくあひしらひたまへるを、中納言(≡秋の中納言)は人知れず(木幡の姫君と)思ひ比べられて、ほほ笑まれたまふ心の内ぞ恥づかしかりける。(三九頁)

C (父関白や秋の中納言は)親、同胞と聞こゆれど、幼くよ見馴れきこえたることもなくて、いと恥づかしげなる御様どもにてさし向かひたまへるを(木幡の姫君は)「はしたなし」とおぼして、そばみたまへるかたはら目、御髪のかばれかかれる肩のわたり、言へばおろかなり。(六八頁)

木幡の姫君への想いに苦悩する中、父関白と帝(後の桂の院)との間で、秋の中納言への女二宮降嫁が決定する。女二宮との結婚に対して、秋の中納言は異論を唱えることなく、素直に受け入れている。それは家の繁栄を望む父の意向を汲んだという理由に加えて、「まことに慰むばかりの御有様ならば、いかに嬉しからん」(五四頁)と、美貌の誉れ高い女二宮を傍に置くことによって姫君への満たされたい想いを慰めようと期待していることが主たる理由である。女二宮を迎え取った秋の中納言は、「(女二宮は)人知れず心にかかる木幡の里(≡木幡の姫君)にも、並びたまふべし」と見ゆるに、

御心落ちるて、『いとかひあり』とおぼしたり」(六四頁)に示されるように、姫君に匹敵する女二宮の容貌に非常に満足する。そして「疾く見比べばや」(六六頁)と姫君と女二宮の容貌とを比較しようとして、姫君の関白邸への引き取りを父関白に催促している。

なぜ秋の中納言は、女二宮と木幡の姫君とを見比べようとしたのであろうか。それは二人を見比べることによって、いづれが最高の女性であるかを判断しようとしたからである。もし女二宮の方が姫君に勝っているのであれば、秋の中納言が姫君に執着する理由はもはやなくなるはずであった。ところが、関白邸に引き取られた姫君との対面後にあらためて女二宮を見ると、やはり見劣りしてしまう。秋の中納言の述懐では、確かに女二宮も用例D・E点線部に示されるように優れた容貌を有しているのだが、その美しさ以上のものを用例D・E傍線部に示されるように、姫君は持ち得ているとの表現になっている。女二宮を迎えてみたものの、やはり姫君の方が優れた女性であることを再認識した秋の中納言は、「なほかの光(＝木幡の姫君)には立ち並ぶまじくや」(八三頁)と、結局女二宮に対して満足することができず、降嫁以後も姫君への想いを募らせることになるのである。

D 女宮(＝女二宮)を並びたまひぬべく見つれど、匂ひ多かるほど、御髪の様などは劣りたまふまじけれど、これ

(＝木幡の姫君)はなほいかにぞや、「様殊に愛敬づき、

らうたきまみのかをりなどは、たとへん方なし」と思ひ比べらるるに、「なほ下の思ひはやむまじきなめり」と、ものあはれなり。(六八頁)

E 大納言(＝秋の中納言)は我が御方に帰りましたまひて、女宮(＝女二宮)を今さら見たてまつりたまへば、何心なくうらもなき様にて、匂ひやかにうつくしげにおはするを、これぞ限りなき人の御様なめれど、なほ言ふよしなく、見ん人(＝木幡の姫君)ただなるまじき様のしたまへるを、かへりてはつらくぞ思ひなさるるや。(六八頁)

以上、秋の中納言の恋愛における思考形態を検討してみたところ、恋愛対象を別の対象と比較することにより、その優劣を判断していることが分かった。秋の中納言が木幡の姫君に恋情を抱き、執着する理由は、秋の中納言が求める「心ばえ」や「かたち」が最高の女性という条件に合致するためであり、必ずしも姫君である必然性はない。その一方で、彼にとっては取るに足らないような女性に対しても恋愛関係を結ぶことが多く見られたが、これは娯楽としての恋愛を享受しているに過ぎず、彼女たちの感情や事情を考慮することなく、自らの欲求に基づいた行動を取るののである。木幡の姫君に対しては、一途な恋情を抱いているとはいえず、それは他者との優劣比較の結果として興味を持っているのであり、いわゆる「色好み」が高じた結果の一方的な執着と言えるのであろう。秋の中納言の人物造型は、「物語世界における典型的な色好

み主人公像」であると結論付けることができる。

二 恋愛物語としての『石清水物語』と伊予守の恋愛観

二・一 『石清水物語』における宿世観

伊予守の恋愛観についての分析を行う前に、『石清水物語』で語られる恋愛譚の特徴について考えてみよう。恋愛物語において、登場人物あるいは恋愛そのものを魅力的に描く際には、男性が女性の（あるいは女性が男性の）どの様な点に惹かれたのかという理由付け、そして恋のかけひきによる互いの心情の変化（恋愛過程）を抽出するのが常套手段である。例えば『源氏物語』において、紫上に光源氏が好感を持つことについては、恋い慕う藤壺に面差しが似通うという理由付けがなされており、当初は形代としての意味合いであったものが、やがては紫上本人への想いに転化されてゆく様子が示されている。薫にとつての大君への恋情については、襖障子を隔てた当初は心を動かすことはなかったが、垣間見を通して大君に惹かれ、対話を繰り返すことにより大君への想いが高まっていく様子が詳細に語られている。この様な描写を通して登場人物の心情の機微やすれ違い等を読者が経験することによって魅力的な恋愛譚を形作っている。

翻って『石清水物語』の場合を考えると、例えば伊予守の恋情は木幡の姫君を垣間見すると同時に激しく湧き起っ

ており、「何ごとにかかることを見て、よしなき物思ひつきぬべき身にもなりぬるかな」（四四頁）、「こはいかなる物思ひのつきぬるにかあらん、我が心ながら、いみじく戒むれど」（四六頁）等と、伊予守自身もなぜ姫君に好感を持つのが理解できずにいる。その後も伊予守は姫君に対して一途な恋情を抱くのだが、そのきっかけとなるような出来事―姫君に惹かれる理由付けや伊予守の姫君への心情の変化が物語内では一切語られないため、恋愛物語として本物語を評価した場合には、そこに描かれている恋愛模様や登場人物に対して、さほど魅力を感じられないのが実情である。

木幡の姫君への不可解な恋情を抱く原因として、伊予守自身は「この世一つのことにもあらじ」（五六頁）と、前世からの宿縁に因るのではないかと推測している。一方で物語終盤において伊予守は出家することになるが、姫君宛に残した「君故に尋ぬる法の道なれば同じ蓮の身ともならん」（一五一頁）という詠歌が表すように、これは姫君との来世での一蓮托生を成就するための行動である。物語の結末部には「かの山深く入りにし人（＝伊予守）も、年々積もりて、願ひのごとく九品の上の品に定まる。同じ蓮の望みも空しからざるべけんぞ、本にははべるめるとかや」（一五三頁）と、仏道修行に励んだ伊予守は、やがて姫君との一蓮托生を遂げたという描写が示され、来世の存在を示唆する物語構造となっている。このように本物語では、伊予守から木幡の姫君への恋

情の理由付けとして「前世からの宿縁」を採用しているが、「宿世観による恋情」は、『源氏物語』を始めとして、平安朝物語では特に男性が女性を口説く際の常套句として繰り返し用いられてきた。もちろんそれらの物語においては、男性が女性に対して恋情を抱く過程が別途描出されており、「宿世」の存在が実際に信じられていたわけではない。あくまでも口先での口説き文句としての位置付けであったと考えるのが妥当であろう。

山口博氏は、「姦通を犯し犯された罪の意識を持って、それはすべて前世で定められた逃れたい宿業、運命、宿縁、宿世であって、不可抗力。これでは自分の行為に対して責任を感じたり、反省したりなどはとうていならない。罪の意識どころか、逆に行為者は己の行為を「しかたがないこと」と是認する結果になる」と、当時の貴族社会においては、罪の意識に対する免罪符として「前世の宿縁」という概念が一般的に用いられていたと指摘している。また前掲の中村修也氏による「恋愛はゲーム性を帯びて、娯楽化している」との指摘をも踏まえると、貴族たちにとって恋愛はゲームであるという認識があるが故に、貴族たちは女をかき口説く際の常套句として、あるいは不本意な契りを結んだ際の言い訳として極めて安易に「宿世」を口にするのである。

ところが本物語においては、そのような意味合いにおいて「宿世」という言葉が使用されているのではない。伊予守は

「宿世」の存在を信じ、「宿世」に縛られて行動しており、さらに言うならば「前世の宿縁」が事実として存在するものとして物語世界が構築されていると考えることができる。詳細について以下に分析を行う。

二・二 伊予守の恋愛観と八幡神の存在

木幡の姫君への恋情を抱いた伊予守は、恋死により無量劫の道に迷うことを避けるため、自らの想いを姫君に伝えようと姫君の元に侵入する。その後は、姫君が実父である関白に引き取られたり、東国での戦乱平定のために伊予守が下向したりと、姫君に会う機会は失われており、伊予守は一層恋情に苦悩することになる。このような状況から脱するため、伊予守は石清水八幡宮に七日間参籠し、自らの命と引き替えに姫君との今一度の対面を祈念する。この願いに対する八幡神の答えとして「夢ばかり結びおきける契りゆゑ長き思ひに身をや焦がさん」(九五頁)という夢想を得るが、この夢想こそが伊予守と姫君との縁が前世からの宿縁であることを示すものであった。

夢想を得た直後に伊予守は、木幡の姫君の元に二度目の侵入を遂げ、自らの想いを吐露する。その際に、姫君の「単衣にはづれたる御肌つきのおつくしき手あたりなど」(一〇二頁)を目の当りにして、強引に姫君と関係を結んでしまい、やがて我に返った際にようやく八幡神の夢想の真意を理解す

ることになる。それは用例F傍線部に示されるように、姫君との逢瀬、そして契りを結ぶに至る関係は、「さるべき世々の契り」であり、「逃れることのできない宿命」であるという認識である。

F ；かかるとあやまち（||木幡の姫君と契りを結ぶこと）をし出でつるは、げに我が心とおおぼえず、八幡にての夢を思ひ出づるにぞ、（伊予守）「結びおきける契りゆゑ」とありしは、かかるとあやまちなりけり」と思ひ合はせらるるに、さるべき世々の契りにて、逃るまじくおはしましけるは、我が身一つの咎にはあらねど、罪重き心地して
：（一〇二〜一〇三頁）

これは、山口氏が指摘するような罪の意識に対する免罪符としての「宿世観」ではなく、八幡神という超越者によって認められた真実の「宿縁」であると言えよう。前世の宿縁を保証し、伊予守の行動を助長するという点において八幡神は大きな役割を担っているのだが、従来の指摘のように八幡神が前世の宿縁、ひいては本物語を支配するような影響力を有しているわけではない。あくまで二人の前世を物語における真実として正当化するだけの役割であることを改めて示しておきたい。

やがて伊予守自身も「木幡の姫君との宿縁」を心から信じるようになり、用例G傍線部のように姫君自身にもそのことを告げて理解を求めらるのである。

G ；（伊予守）「あが君（||木幡の姫君）、さるべきにおぼしなせ。いかばかり思ひ鎮めて過ぐしはべれど、魂などのむげになくなりてはべるにや、うつし心もはべらで、かくおほけなくあるまじき心づかひを御覽せられぬるは、この世一つのことにはあらじ。逃れがたく結びおかせたまひける御契りこそ心憂けれ。今は言ふかひなきにおぼしなして、人に気色知らせじを、忍ばせたまへ：」
：（一〇三頁）

同様に姫君付きの女房である弁に対しても、二人の宿縁に対して理解を求めらる（用例H傍線部）。そして弁は、疑うことなく「宿世」の存在を信じ、以降伊予守を姫君の元に手引きすることになる（用例I傍線部）。

H ；（伊予守）「：『なめげなるけ近きなどは思ひ寄るまじく、あるまじきこと』と思ひ定めながら、『かかると心（||木幡の姫君への恋情）ありけり』とばかり（木幡の姫君に）聞こえ知らせんとて、近づきまゐりたりしに、うつし心も失せて、魂などのなくなりけるにや、我にもあらでかかると（||木幡の姫君と契りを結ぶ）ことの出で来ぬるは、ただ一筋に前の世のことなれば、力なきことにおぼし許して、つゆのあはれをかけたまへ。思ひ余りて、八幡に籠り、命に代へて申したりしに、しかしかの夢に見せたまへりしも、逃れがたき御契りのありてこそは、告げ知らせたまひけめ」とはじめよりのことども言ひ出

でて、心よりほかのおこたりを、千々の社をかけて誓ひ聞かするを、聞く(弁の)心地は、さすがあはれ浅からず。(一〇九頁)

I (弁)「げに今はいかに思ふとも、隠れての(木幡の姫君の)御名のすすがるべきにてもあらず。言ふかひなくてやつれぬる(木幡の姫君の)御身の、心清かるべきにもなし。今一度の対面のあらはになるべきこともあらず。

さばかり何ごとにも(伊予守の)猛き心の、むげに思ひくづほれたるに、長く『憂し、つらし』と思ひおかれたまはんも恐ろしければ、『かかるるべしなり』といふこと、おのづから漏れ聞こえて、いかなる罪にもあらんことは、それもしかるべき前の世のことにこそあらめ」など思ひて：(一一〇頁)

伊予守と木幡の姫君との関係は、現世のみのつながりではなく、前世からの宿縁によるものであった。そのことを八幡神の夢告によって知らされた伊予守は、それを現実として重く受け止め、姫君との縁を何よりも大切にしようとする。ところが現世においては姫君との間に身分差という障碍が存在する。自らとの関係によって、果ては女御ともなるべき幸を奪った上に、終生憂き名を負わせることを伊予守は危惧し、現世での恋愛の成就の代わりに来世での一蓮托生を願うようになるのである。これは悲観の上の決意ではなく、用例Jに見られるように、全ての障碍を超え、来世にて二人の恋愛を

成就させようという前向きな心情である。

J (伊予守)「(木幡の姫君と)前の世の契りは、さすが結びながら、及ばぬ際となりおけるつとめのほど、口惜しく思ひ知らればけれど、暗からぬ道を尋ねて、来ん世にだに、同じ蓮に宿る身となるべく願はれはべるを、台には障りなく結ばせたまへ。志はありながら、すがすがとも思ひ立たればべらで、年月を送るに、勧められきえぬる嬉しき善知識に思ひたまふる。：『今日を待ちはべりける命にや』と、今は心安くなりはべりぬる」：(一二五頁)

以上のことから、伊予守と木幡の姫君の現世での関係は前世から定められたものであるだけでなく、姫君のためだけに伊予守が出家を選び得ることによって、来世においても二人の関係が継続されることを示唆している。つまり、伊予守にとっての木幡の姫君とは前世・現世・来世という三つの世界において恋愛関係が継続されるような強固な間柄、絶対的にも言える恋愛相手と言えるのである。

二・三 物語構造・設定にみる前世の存在

前節において分析したように、本物語では「前世からの宿縁」「宿世」というものが単なる口実ではなく、物語世界における真実として機能していると考えられる。そのことを端的に示している例の一つは、物語の最後に描写されている後

日譚において、伊予守が仏道修行の結果、九品上品に定まり、木幡の姫君との一蓮托生も実現するであろうと草子地にて語られていることである。また、物語を「見る」立場である秋の中納言が、伊予守の姫君への恋情について、『力なきこの世一つのことにはあらじ』など、思ひ許されたまふ（七三頁）と前世からの宿縁であると認めていることから読み取ることが出来る。

さらに本物語において「前世」の存在が暗示されている部分として、伊予守と木幡の姫君のなれそめを取り上げてみよう。物語内では伊予守が姫君を垣間見するところから恋愛譚が開始しているが、実はこれは二人の初対面ではない。姫君を垣間見て恋情を抱いた伊予守は、幼少時に姫君を見る機会があったことを述懐している（用例K）。

K（伊予守）「むげにいはいはけなく、物の心知らざりしほどは、（木幡の姫君を）時々も見たてまつり、（木幡の姫君は）今五つばかりの上におはすれば、もてあそばれたてまつりしも、わづかに夢のやうに思ひ出でらるれど、『御かたちなど、いかなりし』とおぼゆるまではなかりつるを、大人びたまひて後は、こよなくけ遠くのみ慣らひて、また同じ所にも住まずなりにしかば、影をだに見きこえざりしに、：：」（四三〜四四頁）

幼少時であるが故に、姫君に対して恋情を抱くことはなかったものの、二人の間に「縁」があったことは間違いない。こ

のように物語が開始される以前に、二人の出会いが既にあったと設定されていることは、読者にとっては直接には知ることのできない過去、さしずめ「前世」に相当する状態になっているのである。伊予守と木幡の姫君との恋愛が「前世」からの宿縁であるという物語の主張を、「前世」Ⅱ「物語開始前」と置き換えて登場させ、読者にその存在を強く印象づけることを目的としたものと考えられる。

一方で秋の中納言と木幡の姫君の間には血縁関係こそあるもののそれは禁忌としてのみ機能しており、物語開始以前という「前世」における関わりが示されることはない。二人の出会いには物語開始後に発生するものであり、これは「現世」のみの関係であることを象徴しているものと考えられる。

物語構造だけでなく、伊予守の人物設定においても「前世の宿縁」の存在が暗示されている。武士という身分に設定された伊予守は、秋の中納言や今上帝の叔父である中務宮、あるいは秋の中納言の側近くに伺候して、召人として寵愛を受けていた按察使の君等によって「都の貴族を超越する」資質を持つ人物として評価されている。例えば伊予守と初めて対面した際、秋の中納言、中務宮共に都の有職にまさる伊予守の美質を手放しに称賛している（用例L・M傍線部）。

L：（伊予守が）いといたう畏まりて、用意殊に恥づかしげなる様など、（秋の中納言は）目も驚きたまひて、「さしも荒々しかるべき兵の身なれば、』さばかりにこそ」

と推し量られたるを、おろかなる思ひやりにもありけるかな。いみじく思ひ上がり、『我は』と心おごりしたる都の有職たちも、限りあれば、人柄にしたがひて、おしなべゆめゆめしさばかりにやあらん。かばかりなる有様は類あらじ」と愛でたまひて、うちつけに、いみじうこそ思ひつきぬる心地すれば： (四九頁)

M

：(中務宮は)これ(伊予守)をばいまだ見たまはぬには、目驚きて、「世にはかく思ひのほかなる者にこそ。さは、かか人(伊予守)をこそ見ざりつれ。都はむげなる所かな。『時世の有職』とのしらるる君達も、これ(伊予守)に及ぶべきこそなけれ」など、おいらかに誉めたまへば、(伊予守は)殊に畏まりぬ。(一三〇頁)特に秋の中納言に関しては、「かたち」や「心ばえ」が最高な女性を求めていたことを一章にて確認した。このような秋の中納言が伊予守の姿を見て「かばかりなる有様は類あらじ」(用例し傍線部)と恋情を抱くようになるということは、伊予守が秋の中納言によって最高の人物、優れた人物であることを認められたことに他ならない。

従来の先行研究の多くは、このような伊予守の資質に関して「伊予守は武家を装った公家」と見做しており、武士を主人公として設定したものの、その設定を活かしきれていないと指摘している。しかしながらここで強調しておきたいのは、このように貴族を超越する程の容姿を有する伊予守について、

物語では用例N傍線部「いかばかりのつとめによりて、『かくしも生まれ出でけん』と前の世ゆかしき人の様なり」と、「前世からの宿縁」の存在を示唆していることである。同じように秋の中納言も用例O傍線部に示されているように、伊予守の超人的な美貌や武士という身分で生まれできたことを「前世の宿縁」によるものであると捉えている。

N

：これ(伊予守)はやう変はりて愛敬こぼるばかりにて、いかにぞや、見るにただならず、そぞろに思はしき様かたちなどは、誰ばかりの人にも劣るまじう見ゆるを、田舎にのみ生ひ出でたれど、かたはならず、さばかりいと荒々しかるべき奥の夷の名を取りながら、いかばかりのつとめによりて、「かくしも生まれ出でけん」と前の世ゆかしき人の様なり。(四二頁)

O

：(秋の中納言)「伊予守の」様かたちの、人には異なるのにもあらず、け近き様のいみじうのみおぼゆるは、げにいかなる前の世のつとめにて、高き家に生まれずながら、かばかり見る目も愛敬づき、よろづに様殊ならん『戒の力にや』と思ふべけれど、下れる身と生まれたらんは、いかなるにかあらん。：： (七三〜七四頁)

伊予守の資質について渡辺竹二郎氏は「本来公卿に生れる人であるが前世の約束で武士に生れたのだと身分ちがいを宿縁思想で合理化している」と指摘し、三田村雅子氏は、「(伊予守)の力の説明しがたい源泉を石清水の靈験として処

理し、題名ともする安易さが作品の質を規定してしまつた」と共に否定的に捉えている。しかし伊予守の武士という身分と優れた外見・内面的人格との齟齬は物語内で繰り返し語られており、またその齟齬については「前世からの宿縁」によるものとして同様に繰り返し記述されている。これは不適切な設定を合理化するための言い訳ではなく、「優れた貴族であつた前世」の存在を読者に印象付ける狙いがあつたと考えられる。それ故にこそ用例Pに見られるように、姫君付きの女房弁が木幡の姫君の結婚相手として相応しい人物であるにもかかわらず、身分差のある状態で巡り会つてしまつた伊予守のあやにくな「宿世」を残念に感じることに對して、読者は強く共鳴するのではないだろうか。

P : (弁)「伊予守が」愛敬づき清らかなるは、いかなる帝と聞こゆとも、かばかり書き尽くしたまはじ。ただ思ひなしの気高くなぞやおはします。さし並べきこえんに、この人(伊予守)ばかり、かたはなるまじき人であるべきに、なか及びがたき際と生まれながら、さすがに逃れがたく(木幡の姫君と)結びおきたまひけん」と口惜し。

二・四 伊予守と他の女性との交流

前節までに、木幡の姫君に對する伊予守の恋情は、「前世からの宿縁」に根ざしたものであることを確認した。現世に

おける二人の恋情は、八幡神に認めてもらつたことにより、ある種絶対的なものとなり、不可侵とも言える間柄として設定されている。このことが伊予守の理由なき恋情の原点であり、また出家によって来世の一蓮托生を実現することの根拠にもなっている。しかし一方で伊予守には前述の秋の中納言の召人であつた按察使の君との交際や、姫君との邂逅以前に娶つた正妻の存在が設定されており、姫君をして唯一の女性とするような物語展開にはなっていない。これらの女性たちの物語内での役割について以下で確認する。

伊予守と按察使の君との関係は、秋の中納言の元に伺候する伊予守の姿を見かけ、あるいは秋の中納言が伊予守を絶賛する話を聞くことにより、気持ちを募らせた按察使の君が伊予守に文を手渡したことから始まる。伊予守は按察使の君が秋の中納言の召人であつたことを知ると、「いとどわづらはしう、便なくあしかるべく」(八四頁)とむしろ敬遠気味に感じているのだが、相手にせずにて情緒を解さない者と思われることを危ぶんで、按察使の君の恋情に答える形で交際に至る。

伊予守にとっては木幡の姫君が絶対的な存在であるために、按察使の君は比較の対象にはならず、姫君への恋情が揺らぐこともない。むしろ按察使の君との関係が「かかる心よりほかのすさみにつけても、物のみ心にかかりて、胸の飽くべき時なく、静心のなければ」(八五頁)、「増すことなき嘆き」(

木幡の姫君との逢瀬)の後は、よろづ思ひませざられず」(二三二頁)に見られるように姫君の想いを一層募らせるものとなつてゐる。姫君への恋情故に按察使の君との逢瀬は疎遠がちとなるが、戦乱平定のための突然の東国下向の折には「さすが心に離れず、深き志のほども見知らるれば、『按察使の君が)いかに思はんずらん』(八七頁)と氣にかけたり、上京後は「情けなく思はれじ」(二三三頁)と、文を通わし対面を行つたりしてゐる。出家を決意した際にも按察使の君宛に「例よりもあはれを添へて書き尽くし」た文を贈つてゐる。

以上の描写を踏まえ分析すると、本物語における按察使の君の役割としては、一つには伊予守に対して強い恋心を抱くことによつて、伊予守が優れた人物であることを強調する意図があると考えられる。それは用例Q傍線部に見られるように、按察使の君は帝や秋の中納言といった優れた貴族に接する機会を持つており、このような女性が見初めることによつて、伊予守が魅力に富んだ人物であることを暗示している。

Q : 異ごとなく(秋の中納言が伊予守を)誉めたまふを聞くに、いともよほされて、下行く水の湧き返る按察使の君が心の内は、なほ鎮めがたかるべし。…さすが都の内にて、かしこき帝をはじめたてまつりて、「時世の光」とののしられたまふ大納言二人(秋・春の大納言)を見慣らひたる心地は、これ(伊予守)しも心にしみ返りて、忍びがたくなりゆくも、「前の世のことにや」と我なが

ら思ひ知らるる。

(七四頁)

そして、そのような按察使の君の恋情を受け入れて誠実に対応する伊予守の姿を描出することによつて、娯楽としての恋愛を愉しんでいる秋の中納言との差異を際立たせるという意図も感じられる。

伊予守の正妻の存在についても同様のことが言える。結局伊予守は、木幡の姫君との一蓮托生のために、家族や立場を捨てて出家してしまうが、出家の直前、正妻に対して心が通じた夫婦関係が築けなかったことを悔悟し、二人の子どもたちには向後を指示している様子が描写されている。「現世での関係」に過ぎないとはいえ、家族に対してでもきちんと責任ある行動を取っている伊予守の態度は、女性を嘆かせる秋の中納言の恋愛観とは対照的なものとなっている。

もっとも、木幡の姫君を絶対的な恋愛対象として描出するという本物語の主題を考えると、姫君を唯一の恋愛対象として登場させる方が、現代的価値観から捉えた場合には理解しやすい。ところが、当時伊予守のような立場の人物が正妻も持たず、恋愛遍歴もなかったとすると、それは社会的に不適格とされるような問題点であつただろう。本物語においては秋の中納言に象徴されるような娯楽としての恋愛や、それを踏まえた上での至上の恋愛への憧れ、伊予守に見られるような家を維持するための婚姻、かりそめながらも誠実な恋愛という様々な恋愛形態が混在しており、それらを超越するよう

なものと伊予守と木幡の姫君の絶対的な恋愛が描かれているのである。このことは確かに本物語の主題や作者の主張を分かりにくくしてしまっているが、それでも当時の社会常識を鑑みればやむを得ないことでは無いだろうか。本物語の主題の先進性に対して、恋愛・婚姻形態の過渡期にあたる当時の社会形態がそれを的確に表現できる段階になかったことの現れと見做すことができるだろう。

三 伊予守と秋の中納言の恋愛観の差異

拙稿にて示したように秋の中納言は、物語の中盤までは伊予守が木幡の姫君に対して抱いている心情を的確に推測し得ている。これは、秋の中納言と伊予守が共に姫君に対して、真剣でひたむきな愛情を抱いているためであると考えられる。ところが本物語の結末においては、伊予守には出家による一蓮托生、すなわち来世における明るい未来を予感させる内容の描写がなされているのに対して、秋の中納言は伊予守の出家の真意を見抜くことはできず、また姫君に対しても未練を残したままの姿が描かれている(用例R)。

R (秋の中納言は) やんごとなくなりたまふにつけても、この尽きせぬ御心の内の物思はしき(=木幡の姫君への想い)ばかりぞ、やむ世なかりける。「かかるめでたき御中に、いかなりし宿縁にて、さる迷ひのありけん」と、前の世ぞ知らまほしきや。「いとどあるまじきことぞ」

とは、心を戒められけれど、(木幡の姫君を) 思ひ初めにし心の色は失せやらで、ともすればうち嘆かるる大將(=秋の中納言)の御心の内も、年月に添へて、今かくのみなりゆくを、「いかさまにせん」とおぼしわびて、「鹿島(=伊予守)が類にやなりなまし」と、心強く思ひ切りてし心のほど、うらやましくおぼさるれど、一方ならず捨てがたきほだし強くて、背きやらぬほどに、官位も身に余るまで昇りたまひけん。(一五三頁)

このような差異は、前章までに見てきたように伊予守と秋の中納言が木幡の姫君に対して抱くに至った愛情の由来、あるいは恋愛観・女性観の相違によってもたらされたと考えられる。

秋の中納言にとって恋愛とは、自らにとっての最高の女性を捜し出すという目的と同時に、自らの欲求を満たすための娯楽としての意味を有していた。秋の中納言は、木幡の姫君を最高の女性と認めたのだが、その理由は主として姫君の容姿等の外面的な部分によるものであった。秋の中納言は、他の多くの女性との優劣比較を行った上で、姫君が優れていると判断しており、このような基準で女性を選んだ場合には、二人の関係が長続きし得ないことは明白であろう。他に優れた容姿の女性が現れたり、あるいは容色が衰えれば秋の中納言の寵を保つことはもはや叶わない。仮に女二宮の容姿が姫君以上に優れていたとすると、秋の中納言はもはや姫君には

執着しなかったであろう。いずれにしても、このような秋の中納言の恋愛観・女性観の下では、木幡の姫君は真の幸福あるいは救済を得ることはできないというのが本物語の主張である。うがった見方をすれば、これは女君の容姿等に強くこだわって恋愛遍歴を繰り返す既存の王朝物語の貴族的主人公たちへの批判の現れであるのかもしれない。

一方で伊予守という人物はこのような従来の主人公像に対する対偶存在として設定されている。そもそも伊予守は武士の身分として設定されているのだが、この設定は木幡の姫君との間の恋愛に対する禁忌として機能している以外に、物語の主題や描写に大きな影響を与えてはならず、必然性に乏しいものであると見做されてきた。大番役として上京する、戦乱平定のために東国へ下向するといった武士としての行動が物語内に記述されているものの、伊予守の振る舞いや価値観は武士のそれとは大きくかけ離れたものである。そして物語の随所で「貴族以上に貴族らしい」という描写がみられることから、伊予守を単に貴族社会における低い身分の者と設定するだけで十分であったと考えられる。あえて武士という従来の物語にはない身分を採用した背景には、当時台頭し、貴族社会を席巻しつつあった武士という存在によって「貴族に対する新たな価値観の持ち主」を象徴するという意図があったのではないだろうか。

同様の考察は、伊予守が木幡の姫君に対して一途な愛情を

抱く原因とされる「前世の宿縁」という設定にも通じるものがある。本物語においては、伊予守と姫君との間に前世からの宿縁が存在したと設定されており、そのために伊予守は姫君に対して抑え切れない愛情を抱くに至ったとされている。

ところが、二人の前世の出来事の詳細について語られることはなく、「前世の宿縁」という設定は、伊予守が姫君に対して抱いたひたむきな愛情の理由としては、読者を十分に納得させるものとは言いがたい。さらには「前世の宿縁」という思想そのものは不本意な恋愛関係や罪悪感を伴った恋愛関係に対する言い訳、免罪符として一般に使用されていたことは既に述べた。本物語では「前世の宿縁」が実際に存在するという世界設定になっているという差異はあるものの、それ自体はさほど新奇な設定であるわけではなく、むしろ言い古されたものである。

それにもかかわらず、「前世の宿縁」という理由付けを採用せざるを得なかったのは、一つには本物語の主題である「出家による一蓮托生の成就」を強調する意図があったと推察されるが、それ以上に、来世を契るに至る伊予守と木幡の姫君の間の強固な恋愛関係を、現世における出会いを出発点として描くことができなかつたのではないだろうか。本物語における伊予守と姫君の場合のように、垣間見によって始まるような恋愛では、相手の容姿や言動といった表面的な部分に惹かれてしまいがちであり、それでは秋の中納言の恋愛観

と同一になつてしまふ。これを避けるためには、伊予守と姫君との間に恋愛感情が芽生えるに至る理由を描く必要がある。例えば『源氏物語』における光源氏と藤壺や紫上との間には、幼少時に共に過ごしたという時期が設けられており、それぞの間の強固な恋情に対しての理由付けとなつてゐる。本物語においても、幼少時の伊予守と姫君との間には面識があつたとの設定があり、これは物語構造の上では前世に準じるものであると前章において述べた。すなわち「前世の宿縁」という設定には、伊予守と木幡の姫君との関係は単に垣間見以降に始まつたものではなく、それ以前に深い心の交流が存在してゐたことを象徴するものとして機能していると考えられる。

おわりに——伊予守と秋の中納言の対比に基づく物語構造の再評価

以上の分析に基づいて、『石清水物語』の構造について捉え直してみよう。本物語の中心となるテーマは、伊予守と秋の中納言が木幡の姫君に心惹かれながらも、それぞれに設定された禁忌のために懊悩煩悶するという部分である。この点においては伊予守と秋の中納言とは高い同質性を有しており、そのことが二人の間に男色関係を成立させ、さらには秋の中納言が伊予守の心情の代弁者としての役割を果たすことを可能としていた。

木幡の姫君に対する二人の恋情は、どちらも非常に強いものであるが、彼らの拠つて立つ恋愛観・女性観には大きな隔たりがあった。秋の中納言が姫君に惹かれた理由である「最高の女性」という価値基準の下では、様々な現世の絆しを振り切つて姫君だけを選び取ることはできず、結果的に未練のみを残した成就し得ない恋愛として描かれてゐる。一方で伊予守にとつては、姫君は前世において契りを交わしたかけがえのない相手であり、その価値は現世における何よりも重い絶対的なものとなつてゐる。それ故伊予守は恋愛を成就するために、他の全てを捨て去つてしまふ手段である出家を躊躇なく選択することができたのである。姫君の存在を、あくまでの現世の価値観に基づいて判断する秋の中納言にとつては、伊予守の決断は決して理解することのできないものであつたに違いない。このように伊予守が姫君との「来世」を見据え始めた結果として、秋の中納言は伊予守の出家に関しては、その心情を正しく推測することができず、両者の乖離が発生したのである。

本物語では、伊予守によって体现されたような「絶対的な」恋愛を描くことが主たる目的であつたと考えられる。絶対的な恋愛関係をもたらしきつかけとして本物語が採用した理由付けが「前世の宿縁」であつた。これは現世という限られた価値基準の下での判断材料、例えば容姿や風情、和歌や会話における機転、いづれをとつてみても、何物にもまさる

恋情の理由としては物足りなく思えたからであろう。当時の貴族社会においては、恋愛自体が生活に密着した必要不可欠なものであり、恋愛過程そのものはどうしても類型的になつてしまふ。『石清水物語』において、全てを捨てて出家してまでも成就したいと願つたほどの絶対的な伊予守の恋情を理由付けるためには、「前世の宿縁」というこちらも絶対的な理由を与える必要があつたのであり、これは当時の貴族社会という制約の故であると考えられる。同様の時代性による制約は、木幡の姫君との絶対的な恋愛を体現しているはずの伊予守が、他の女性と恋愛関係になつたり別に正妻を持つていたりする点にも窺える。本物語の主題である「絶対的な恋愛」を表現する舞台としては、王朝世界では限界がある。現世では成就できない「絶対的な恋愛」を扱つた作品は、江戸時代に至つては心中物として花開いたが、それでもなお「絶対的な恋愛」に至る理由付けを完全に表現しきることは困難であつた。このような主題を扱つた文学作品の成熟は、男女一対一の恋愛観・結婚観が一般化した上で、詳細な心理描写を伴つた近代小説の登場を俟たねばなるまい。

* 『石清水物語』の本文は、『鎌倉時代物語集成 第二巻』（笠間書院）に拠り、表記は私に改めた。

その他の引用に関しては以下に拠り、表記は一部私に改めた。

『竹取物語』：新編日本古典文学全集（小学館）

注

(1) 拙稿『石清水物語』における男主人公の心理と物語の論理」

『詞林』三〇・二〇〇一年十月

(2) 長谷川政春「境界・変換・話型」物語史としての『石清水物語』—（『境界』からの発想・旅の文学・恋の文学』新典社・一九八九年）、神田龍身「男色、暴力排除の世代交替—『石清水』

『いほでしのぶ』「風に紅葉」—（『物語文学、その解体—『源氏物語』「宇治十帖」以降』有精堂・一九九二年）

(3) 拙稿『石清水物語』における男色の再検討」（『国語と国文学』二〇〇八年六月掲載予定）

(4) 左大臣殿の若君（『秋の中納言』、十一になりたまひて、元服したまひて殿上したまふ。侍従と聞こゆ。いとど上げまさりのうつくしき、言ふ限りなくて、おぼろけの人見えにくげなる気色ぞしたまへる。帝よりはじめたてまつりて、いみじき世の有職とおぼし喜びたり。 （八頁）

・二つを並べては、なほ秋の中將（『秋の中納言』）は静かに、頼もしきところ見ゆる人様なれば、（帝の）御心寄せまさる。：かれ（『秋の中納言』）はなまめかしく、よしあり心にくく、そこはかたなく心恥づかしき様は殊なり。まことに秋の夕べとおぼえたる。何ごともとりどりに挑みかはして、はかなき草木につけても、目馴れざらんことをのみおぼしたり。 （二三頁）

(5) なほ、（秋の中納言）「伊予守は）いかなることに、世を背くばかりの心なりけん」と思ひめぐらしたまふに、「すべて、明け暮れもの嘆かしげなる気色の見えしを、様よくもて鎮めて、あざ

- やかにほもてなしたりしかども、下解けぬ様に見ゆる折々ありしは、かかるとなりけり。我が思ひ寄りし筋の違はで、折しもこそあれ、(木幡の姫君を)雲居はるかに聞きなして、堪へぬ思ひに勧められたるにやあらん」などおぼし続くるにも、ともあれかくまれ、若ういみじかりし(伊予守の)様の、惜しう悲しく、面影のみおぼえて、恋しきことぞ限りなかりける。(一五〇頁)
- (6)拙稿『石清水物語』の後日談に示される「不義の子」の可能性とその意義(『詞林』三五・二〇〇四年四月)、同「女君の人物描写に見る『石清水物語』の救済の構図」(『文学・語学』一七九・二〇〇四年八月)
- (7)注(1)に同じ
- (8)中村真一郎『色好みの構造―王朝文化の深層―』(岩波新書・一九八五年)
- (9)中村修也『娛樂―平安貴族の恋愛―』(講座源氏物語研究)二・おうふう・二〇〇六年)
- (10)その中に、(かぐや姫に)なほ言ひけるは、色好みと言はるるかぎり五人、思ひやむ時なく、夜昼来たりけり。…世の中に多かる人をだに、少しもかたち良しと聞きては、見まほしうする人どもなりければ、かぐや姫を見まほしうて、物も食はず思ひつつ…(二〇〇頁)
- (11)池田和臣『源氏物語』の仏教(『解釈と鑑賞』五九―三・一九九四年三月)
- (12)山口博『王朝貴族物語 古代エリートの日常生活』(講談社現代新書・一九九四年)
- (13)注(9)に同じ
- (14)注(12)に同じ

- (15)神田龍身『石清水物語』(『王朝物語必携』学燈社・一九八七年)、長谷川政春(前掲注(2)論文)、岡陽子『石清水物語』の構想―「無名草子」を起点として―(『古代中世国文学』一九・二〇〇三年六月)
- (16)藤岡作太郎『鎌倉時代の小説(二)―石清水物語』(『鎌倉室町時代文学史』大倉書店・一九一五年)、志田義秀『軍記物語と擬古物語』(『国語と国文学』三一〇・一九二六年十月)、山岸徳平『物語類』(『日本文学書目解説』(三)鎌倉時代(下))、岩波書店・一九三二年)、吉澤義則『擬古小説』(『鎌倉文学史』東京堂・一九四〇年)、金子武雄『中世の物語文学概説―鎌倉時代に於ける小説―』(『日本文学講座』三・改造社・一九五四年)、山森雅樹『石清水物語』の構成と問題点―所収歌の調査を通して―(『説話・物語論集』四・一九七六年二月)
- (17)渡辺竹二郎『石清水物語の二重性』(『長野県短期大学紀要』二・一九五一年二月)
- (18)三田村雅子『石清水物語』(『解釈と鑑賞』四五―一・一九八〇年一月)
- (19)白幡由美『石清水物語』における主人公造型―伊予の守と秋の君―(『東洋大学大学院紀要(文学研究科)』三六・二〇〇〇年二月)では、伊予守の貴族的資質は彼のあやにくな宿縁を提示するものと捉えている。
- (20)木村朗子『恋する物語のホモセクシュアリティ―『石清水物語』における性の配置―』(『物語研究』四・二〇〇四年三月)では按察使の君の役割を、秋の中納言と伊予守の主従の序列を解体し、二人の同性愛関係を伊予守と按察使の君との異性愛関係へと置換するものと捉えている。

(21) 【正妻に対して】…(伊予守)「人より先に見初めてしを、おろかにはなけれど、我、人に似ぬ癖にて、世の人のやうにも馴れきこえざりつるを、『長らへては今見なほしたまはん』と、心長く思ひつるを、あやしく例ならず心地のおぼえて、『はかなくなるべきことの近づきてや』と心細きにも、つひに憂き者に思はれきこえてやみなん憂はしきもさるものにて、いかなる人に見えて、『妻』『さてもあやしかりし者かな』と思ひ比べたまはんずらむ』と思ふこそ、この世にとまる思ひなれ」など、心もとなげに言ふを、例ならずなつかしげに語らひ明かすを： (一四四頁)

【子どもに対して】…二人(犬若・乙若)を呼び寄せて、人聞かぬ間に、(伊予守)「いかなるにかあらん、そぞろに心の澄みて、今日明日に限る心地のみすれば、おのれが十にならぬ先に、見捨てつべきこそあはれなれ。我はかなくなりなば、犬若は国へ下りて、十一にならば、男になりて君(秋の中納言)の見参にも入り、心深くなりて、亡き親の屍を汚すことなかれ。時々は都に上りて、藤壺の女御の御方(木幡の姫君)へ仕うまつるべし。乙若は、物の心つくほどにもならば、法師になりて、我が後の世をも弔ひ、『西方浄土へ参りて我を見ん』と思ふべし。ここに住みて、花の盛りには仏に奉れ」など、二人に言ひ聞かすれば： (一四五頁)

(22) 服藤早苗「家の成立と性愛」(『平安朝の女と男 貴族と庶民の性と愛』中公新書・一九九五年)、西村汎子「古代の家族・共同体と女性」(『古代・中世の家族と女性』吉川弘文館・二〇〇二年)

(23) 注(3)に同じ

(24) 注(16)に同じ

(25) 注(12)に同じ

(26) 注(3)に同じ

(27) 三田村雅子(前掲注(18)論文)、長谷川政春「王朝物語―その中心と周縁」(『王朝物語必携』学燈社・一九八七年)、白幡由美「石清水物語」の都と鄙―揺れる価値意識―(『東洋大学大学院紀要(文学研究科)』三八・二〇〇二年二月)では、秋の中納言と伊予守の対比を都と鄙という二元的価値観として捉えている。

増田繁夫「空蟬と夕顔―処世のかしこさとつたなき―」(『源氏物語の探究』五・風間書房・一九八〇年)、同「古代の世界に生きる光源氏」(『国文学』三八―一・一九九三年十月)、同「帚木三帖と空蟬の意味―源氏物語の主題―」(『源氏物語とその前後研究と資料』武蔵野書院・一九九七年)、同「光源氏の古代性と近代性―内面性の深化の物語―」(『源氏物語研究集成』一・風間書房・一九九八年)、同「源氏物語の人物の論理・思考・行動―「自責する心」「良心」の発生―」(『源氏物語研究集成』六・風間書房・二〇〇一年)では、『源氏物語』の登場人物たちが前半部では、古代的な自己中心思维によって行動しているが、次第に自己を内面的に規制する主体的な当為の観念という近代性を持ち始める」と指摘する。本稿における秋の中納言と伊予守の対比を考える上で非常に示唆に富む指摘である。

(いのもと・まゆみ 本学大学院博士後期課程単位取得退学)